

文章を書いて
発信することは
大きな武器になる。



英語科
教学企画部

黒川 拓朗

『バッタを倒しにアフリカへ』

光文社新書
前野ウルド浩太郎 著



— 教員になられたいきさつを教えてください。

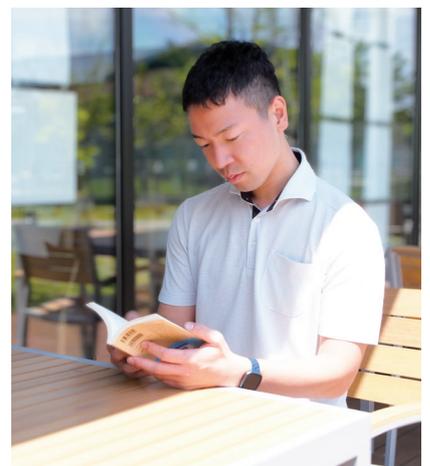
僕はずっと音楽をやっていて、大学は芸大に進みました。クラシック系、特にミュージカルやオペラといった舞台音楽の作曲を学んでいたんですよ。その時は何となくボヤっとした感じで、数ある仕事の一つとして教員を考えていたんです。そして在学中、作曲を学ぶために意気揚々と舞台音楽の本場・英国へ留学したんですが、いきなり挫折しまして…。大学で学ぶにはあまりに自分の英語力がなかったんです。当然ですが、英国で音楽を学ぶのなら、まず英語力をつけないと。そこから必死で英語をマスターしましてね。その時抱いた危機感や経験を、これから世界へはばたく人生の後輩たちに伝えて、手助けしていきたい。そう思って、英語の教員になりました。もちろん音楽の教員免許も持っています。本校では英語の授業も持っていますし、国際バカロレアコースでは英語で音楽も教えています。

— 今回先生が取り上げられた本は『バッタを倒しにアフリカへ』。軽く内容を教えてくださいいただけますか？

著者は昆虫を研究をされていて、日本の大学で博士号まで取られた方なんです。ただ博士号を取ったはいいけど、なかなか仕事がない。なので、研究者としての一発逆転を狙って、西アフリカのモーリタニアって国に行きます。そこで異文化に触れながら、研究所の人たちとの交流、自分の目的であるバッタの生態を解明、その研究をしている自分の生活を日記風にまとめたのがこの本です。

— この本を読まれたきっかけは？

まず、表紙です。全身緑色のタイツを着たバッタ姿の著者が写っているんですけど



ど、書店で見かけた時に「なんだこりゃ？」って。で、本のタイトルもユニークでしょ？実際に手にとって読み始めてみると「バッタに食べられた」という夢を叶えるため」ってある。「何なんだ、この人は？」って。ですが、読み進めていくと、ものすごくアカデミックでしっかりしているんです。

——私もこの本を実際に目にして、「なんじゃこりゃ」って思いました。新書ってなかなか手にして読むハードルが高いと思うのですが、この本に限っては気になってつい手にしてしまいます。それほどインパクトがあるし、内容も読んで面白いので、必ず本校の図書館に入れようと思いました。

そうですね。この本は内容も興味深いです。特に理系の世界がとてもしっかりやすく書かれていますね。理系の世界について知りたい方にも、おすすめの本です。

——この本を読んで印象深かったエピソードを教えてください。

いくつかあるんですけど、移動の際にお世話になった運転手さんとの関係とか、何とも言えない感じで面白かったです。運転手さんとはとても仲良くなるんですけど、ただ、ことあるごとにお金をせびってくる。あと、賄賂が多い社会で、お金だけじゃなくヤギも賄賂として使われたり。研究の話も面白いんですが、このような現地の人たちとの交流、異文化に戸惑うさま、自分が想定するのとはまったく違う方向に話が進んで

行ったり。著者の前野さんは作家ではないのに、文章がお上手で、どんどん頭の中に話が入ってきます。

——人にどう自分の考えを伝えるか。作家はもちろん、研究職にばかり、どの分野でも大切なポイントなのかも知れませんか。

前野さんのすごいところは発信力だと思います。研究者だと、その分野の研究だけされているイメージが強いんですけど、前野さんのように作家ではない人でも、文章を書いて発信することは大きな武器になるんだなあと。遠い遠い異国の地で、バッタの研究に情熱をささげる姿勢、そして文章から垣間見える著者の人柄。コミカルな部分も多く、それでいて環境問題や



貧困といったすごく真面目なテーマも取り上げられています。この本を通じて、遠い日本に住んでいる私たちにも前野さんの活動を知ることができる。それはとてもありがたいことだと思います。

——知ることがなかった世界を知ること、物を考えるきっかけにもなりますよね。先生はこの本を書店で手にされたと思うんですが、普段はどんなジャンルの本を読まれることが多いんですか？

雑食というか、あまり特定のジャンルの本が好きっていう風なことはありませんね。本のタイトルでなくとなくテイストというか、方向性とかわかるじゃないですか。書棚に並んでいる本を眺めて、琴線に触れるタイトルを見つけたりしたら、「この本、面白そうだな」って手にすることが多いです。あとはユーチューブ番組とかで紹介をされている本に興味を持ちたりすることも多いです。音楽の話で「元ネタになったのはこの本ですよ」とか紹介されていたら、読んでみようかなって思います。

——最近、ユーチューブの番組で取り上げられたからって本を探しにくる生徒も多いんです。インターネットが生活に根付いて、本と出会うシチュエーションが大きく変わりました。

ここ数年、書籍をタブレットで読むケースも増えました。以前なら、書店に足を運んで本を探すというア



クションが、今はKindleで本を選んでいいなと思う本に出会えたら、タブレットに落としたり、アマゾンや書店で実物を手に入れたい。ただ、専門書はやはり紙にこだわりますね。「このこの部分を確認したい」って時、電子書籍でワードを検索してそのページを開くだけでは不便なんです。「これ、前どう書いてたっけ？」ってページを移動させるのが大変で。電子書籍と紙の本はそれぞれにいいところがあります。深く読み込もうとすると紙の本が向いているのかもしれないですね。

——最後に在校生のみなさんにメッセージを。

私が中高生だった頃と違って、今の環境では本を読むというアクションに対して、ちょっとハードルが上がっているという感じがします。昔は…なんていうか、普通に何か暇な時間があったら本を開いてページを捲るといのが当たり前でした。それが今はユーザーブであったり、他のSNSであったりとかが主流になってきて。そして、社会人になると仕事が忙しくて時間がどんどんなくなって、ゆっくり本を読むというのができなくなってきました。

本校はまさに「学校まるごと図書館」という校舎の作りになっていて、休み時間とかに本を気軽に開くことができる環境になっています。ぜひ、「今しか読めない」ってくらいの気持ちで本を読み漁ってほしいなと思います。

今回紹介した『バッタを倒しにアフリカへ』は著者

の発信力はもちろん、彼の人柄やバイタリティー、そしてチャレンジ精神などなど、中高生の今だから感じる何かがあると思います。大阪国際の在校生に読んでほしい一冊ですね。

インタビュー

大阪国際中学校高等学校 図書館司書

株式会社 紀伊國屋書店 角井 貴乃